

健康文化

病める青い星

高田 健三

今年は戦後最悪であった1993年以来10年ぶりの稲作の不作が予測され、一部では早くも、銘柄米の入札価格が高騰しているという。8月中旬までの気象異常からすると、今後、天候が本来の夏らしさを取り戻したとしても、作柄の回復は見込めないらしい。特に米どころの東北地方は、低温、日照不足の影響で凶作になる可能性もあると云う。しかし、国民の食生活の変化から米の消費量も減り続けていることもあって、10年前の時のような“米騒動”は起こらないとみられている。

米の出来、不出来は気象条件により大きく左右される。夏の太平洋高気圧の張り出しが弱いところに、オホーツク海の高気圧の勢力が強いと、そこから湿った冷たい空気が、北東の風となって長期に渡って東北地方に流れ込んでくる。この地方では昔からこれを“やませ”と呼んで、米など農作物に大被害をもたらす元凶として恐れられている。今年はこの条件に当たったらしい。時を経て起こる、地理的に避けえないこの気象異変は、土地の農家は勿論、この地方に住む人たちにとって、昔は生死にも関わる天災であった。飢饉にまつわる悲劇や悲話は、今も尚歴史上の物語として伝えられている。異常気象による被害の対策は、今もこの地方の大きな地政学的問題である。

日本が冷夏に悩まされている時、異常な猛暑がヨーロッパを襲っていた。新聞に依れば、42℃を超したフランスでは、保健省は猛暑による死者が、初めの3千人の予想から、後に、1万人を超すと推計を改めた程である。丁度バカンスの時期と重なり、医療が手薄になったことも一因との指摘もある。その中で、犠牲者に高齢者が多いと言う報道には、同年輩の一人として一入心痛む思いがする。山国のスイスでも、観測史上最高の41.5℃を記録したと云う。この熱波のため、ドイツでは小麦などの穀類が8年ぶりの不作となり、中でもビールの原料のホップは平年作を25%も下回る見込みとか、ビールの値上げに波及しそうだと云う。8年前と言えば丁度その頃、フライブルグ（南ドイツ）に留学していた娘夫婦が、土地の人の言う“百年ぶり”の猛暑に悩まされた時である。今年はその時を上回ると言うから大変なことに違いない。

ところが、干ばつによる大きな被害が広がっている中で、ワイン業者だけはホクホクであると言うから皮肉である。十分な日照のおかげで葡萄の生育が上々で、白ワインは歴史的なビンテージものになるらしい。この人達にとってこれは正に天の恵みである。何事にも陰と陽の二面があるのは自然の摂理と云うべきか。この猛暑が終息したら、せめてこの上質のワインが、猛暑で痛めつけられた人達の心身を癒してくれる贈り物になれば幸いである。

ヨーロッパの主要諸国は日本で言うと北海道からサハリン（旧樺太）辺りまでの高緯度、つまり北の方に位置している。気象地理学的に必ずしも同じとは云えないだろうが、夏は日本の本州、四国、九州等よりよほど凌ぎよいようである。そんな日常を過ごしている人達が、40℃を超える熱波に襲われては堪ったものではあるまい。しかし、猛暑だからと云って先進国で多数の死者が出たことは驚きでもある。それ程、日常と非日常の落差が大きかったのである。エアコンの普及している我が国では考えづらいことでもある。

それで思い出すのは以前、北海道の快適な夏を楽しもうと、ドライブ旅行したときのことである。レンタカーを予約するに当たり、北海道に住んでいたことのある友人に訊いたところ、エアコン付きのレンタカーは必要ないと云う。ところがその年は、宿の仲居さんも記憶にないと云うほどの、30℃を超す猛暑の北海道に当たり、ドライブ中は熱風に曝され、札幌以外のホテル、宿ではエアコン無しの夜に苦しめられた。家内は何のために北海道まで来たのか分からないと云って怒り出す始末であった。戦後エアコンの無い時代、何度か38℃を超す猛暑を経験したが、実験室に居ても何もする気になれなかったことを覚えている。40℃とは想像も出来ない暑さである。

思い返せば我々オールドボーイの古き良き時代は、自然の風に涼を求めたものである。団扇や扇子の動きに、その日の暑さが現れていた。ガラス戸を開け放し、蚊遣りを焚いた簾戸のある部屋の片隅には、大きな顔をした扇風機が置かれているのが、家庭では日常、目にする風景であった。日が沈み海風と陸風が入れ替わる夕風の時は、じりじりと浸み入るような暑さを払うために、打ち水の匂いのする縁先に出て、冷えたスイカを食べたものである。風が動き出して涼しくなると、夜の更けるのも忘れて花火に夢中になったこともある。私の記憶に残る古き日本の、夏の風物詩である。

大正生まれの者からすると、戦後、日本ほど生活様式の変った国は無いように思える。日本人は得意の器用さで、あっと云う間に欧米の文化を消化・吸収し、日本独自の文化を創り上げてしまった。嘗て揶揄された“ウサギ小屋”は大変身である。そして高度情報社会の今日、サラリーマンの生活は、エアコ

ンで適温に調整された自宅と会社で、パソコンを自在に操る生活が日常となった。今や、情報機器をこなせるか否かで経済的格差（デジタル・デバイド）が生ずるとまで云われる。能率主義の競争の中、現代人はどうやって” 憩い” を摂るのであるか。折角の緑の公園も人影は疎ら、涼しさを増した夜となっても治安の悪さもあって、うっかり歩いてもおれない。もはや星影の下でのランデブーは、映画の中の世界なのである。

昨年9月、スイスを訪ねたとき、半月以上も早く山地の積雪が始まり、季節はずれの天候異変に、牧畜農家は放牧してある牛を下山させるのに大わらわであった。今にして思えば、これなどは今年の大異変の前触れであったのかもしれない。地球と云う星に特徴の大気は、様々な表情をもって地表を包んでいる。我々人類はその表情の変化に、畏敬の念をもって向き合ってきた。昔の人は、豊穰をもたらした穏やかな年は、天の恩恵に感謝を捧げ、異変の時は飢餓に耐え、ただひたすら祈り、天の怒りの静まるのを待つしかなかった。

科学の進歩した今日でも、気象異変の正確な予知は困難であり、ましてや回避するなど不可能なことである。今年の夏のような異変は、北半球の中緯度を取り巻く偏西風の流れが、大きく南北に蛇行したことが原因の一つとも云われている。大きく南に蛇行した所では冷夏になり、北へ振れた所では、南からの熱気が流入して猛暑になると云うのである。しかし、何故そのような大蛇行が時に起きるのか、私の知る限りでは、未だ解明され尽くされていない。

干ばつの時、神仏に祈って雨乞いをする習慣は今でも儀式として残っている。一方、人類には英知をもって常に不可能に挑戦して来た歴史がある。その中でも“気象制御”は自然現象に挑戦する壮大な夢のプロジェクトとも云うべきものである。ヨウ化銀やドライアイスの子粒子を、雲の中に散布して降雨を促進させたり、台風の勢力を弱めたりする試みがなされている。この方法が確立されれば、干ばつによる農作物の不作や、毎年のように世界のあちこちで猛威を振るう台風やハリケーンの被害を、大幅に減らすことが出来るのだが、残念ながら未だ実験の域を出るに至っていない。

気象を変えることが出来なければ、それに対応するにはどうすればよいかと人は考える。今日、遺伝子工学の手法を用いれば、我々のニーズに沿った新種の植物や動物を創ることも、不可能では無くなってきた。低温、高温、干ばつや台風などの厳しい気象条件に強い農作物を創り出せばよいのである。既に寒冷や台風などの強風にも耐えられる、矮生の米の品種が創られていると云う。地球の陸地の4分の1を占める砂漠の緑化も、あながち夢物語とは言い切れない。一方、人間自身に関わる再生医療や分子医学の進歩には目を見張るものが

ある。生命科学が21世紀最大のホープと期待される所以であり、その進歩は人間の自然観、生命観を変えることは間違いない。

産業革命以後、人間はよりよき生活を求めて物造りに励み、今日の文明社会を創り上げてきたが、その間に排出された廃棄物に依る地球環境の汚染は、許容限度を脅かす程までになっている。しかし、大気中のCO₂等の増加による地球温暖化と云う、目には見えないが重大な気象変化でも、日常生活の中では実感出来ない。ところが、ノルウェーやカナダにある巨大氷河の現場に立つてみると、過去10年、20年の間に融氷が進んだ証拠を目の当たりにすることが出来る。年々、氷河自体が縮小し、その先端部分が大きく後退し続けているのである。地球規模の変化を起こすエネルギーの大きさに、恐怖にも似た不安感さえ覚える。国際的温暖化防止を見据えた京都議定書も、各国の利害が絡んで、その全面的実行の前には困難な道程が待っている。人間の英知も、政治の駆け引きの中に埋没して終うのか。今回の世界規模の異常気象が、大気汚染による温暖化が原因だと指摘する気象学者の警告に、今や政治家は真剣に耳を傾ける時である。

折しも今年の8月、6万年ぶりに火星が地球に“超接近”した。この次の大接近は284年後まで無いと云うから、今生きている全人類が遭遇する最期のチャンスである。この時とばかり、天文学者は勿論のことアマチュア天文愛好家も大興奮であった。私も幸いに何度か、南東の夜空高く、一際目立って赤く輝やいているのを見ることが出来た。やはり特異な雰囲気を持った星である。古代、メソポタミアでは天体は神聖なもので、人間生活の運命を支配するものと信じられていたと云う。そんな時代、血の色のような赤い星が一段と大きくなって近づいて来ると、人の心の中に不安感が募り、戦争が起こると思われていたらしい。今の世の中、そんなことを思う人はいなであろうが、最近の気象異変は勿論のこと、世界的な政治・経済の混沌、大規模なテロの多発、報復戦争の繰り返し等、世界を覆う大擾乱の陰には、人知によるコントロールの域を超えた、狂気のような力さえ感じられる。

1961年、旧ソ連のユーリ・ガガーリンは、人工衛星ボストーク1号に乗って、人類最初の宇宙飛行に成功した。「地球は青かった」とは、その時彼が衛星の窓から眺めた地球の印象である。この短い彼の言葉には、その“青い星”に住んでいる地球人としての感動を伝えて余りあるものがある。その星を汚すものが居るとすれば、それは人類であることを忘れてはなるまい。(2003年 8月)

(名古屋大学名誉教授)